

1. 試練としての生そのもの(p491-496)

- ・ 帝政期の哲学者の「修練的なもの」で重要なこと  
試練≠節制  
試練≡生存の一般的な態度  
⇒生そのものが絶えざる試練とみなされ、思考され、生きられ、実践されなければならないという重大な考えが現れてきた
- ・ 「試練としての生」を示す、セネカの文献:『神慮について』  
導きの糸…神は父(世界の父、人間たちの父)であり、尊敬されるべきという主題  
セネカの言葉:神は父であり、したがって母ではない。  
母親の特徴…子供に寛大。赦しを与えるのに向いている。なぐさめるのに向いている。  
父親の特徴…教育を責務とする。「力強く(=勇敢に)愛する」「力強く罪をおかせ」  
→熱意をもって、疲れを知らぬ活力をもって愛する  
＝子どもたちがしかるべき方法で育てられるように心を配る  
＝疲労や苦難や苦しみを与えて、実際の疲労や苦痛、起きるかもしれない不運や不幸に  
対して子どもたちを備えさせる  
⇒父や神は力強く活力にあふれた人間の教育を保証し、力強く活力にあふれた人間を  
作る(=人間に対する教育的な心配り、≠神慮にみちた寛容という母親モデル)  
教育的な逆説…父なる神が設ける、「良き人間」「悪しき人間」の区別  
良き人々がたえず苦痛にさいなまれ、苦痛を与えられ、人生のけわしい道を汗だくになり  
ながらよじ登ろうとしているのが見られる  
→良き人々はたえず苦痛や不運や苦しみに出会う  
→悪しき人々は休らい、なににもわずらわされずに人生を楽しく生きている  
セネカの説明:  
教育において悪しき人々が恵まれており、良き人々がさいなまれ、たえず試練におかれて  
いるのは実に論理的で合理的  
悪しき者…神は彼らを享楽に委ね、教育をいい加減にする。  
→何も生み出さないことを分かっているから  
良き者…神が彼らを試練にさらすのは、彼らを強くするためであり、勇気と力を持った  
者にし、彼らを自分に対して備えさせるため。生とはまさに、試練。
- ・ 生とは試練であるという考え方  
①試練と不幸からなるシステムを持った生、こうした生全体が試練であるという考え  
自己の実践・自己陶冶…不十分な教育の代わりとなるもの  
例)『アルキビアデス』:自己への配慮とは、若者が政治の道に入ろうとするときにしかるべき方法で自分  
を訓練するために実践すべきものだった  
ヘレニズムおよび帝政期の自己陶冶:一生自分に専心しなければならないものだった  
セネカの文章:生全体が個人の教育であるべきだ

⇒ひとは、さまざまな人生の不幸を通して自分自身を教育することになる！

=ひとは、人生全体を通して自己を教育するとともに、自己を教育できることを目的に生きる

⇒生と自己育成が広がり等を等しくしていることが、試練としての生の第一の特徴。

②あらかじめ与えられた二分法に完全に基づいているという考え

試練としての生…良き人々のためだけにあり、作られている

=良き人々が他人から区別されるためにある

⇒試練が一般的で教育的で差別的な形式をかたちづくっているという原則

・ エピクテトスの文献:『語録』

神…格闘技の師に例えられる

格闘技の師…弟子をうまく育てるために、できるだけ粗暴な敵に立ち向かわせる

→オリンピアの競技会チャンピオンとするため。試合の日に勝利の栄冠を勝ち取るようにしてやる。

偵察者…のちに様々な影響を与える面白い考え方

本性からしてきわめて高い徳を持ち、じゅうぶんに力があることを示した人がいれば、神は他の人間の中と一緒に関係が混じり合った日常生活の中に放置してはおかず、彼を偵察者としてこのうえない危険や苦難の中に送り出す。(p.494-495, l1)

偵察者が行うこと…試練や災難を乗り越えることができると教え、そのために取るべき方法も教える

みんなが恐れていた危険はそれほど心配するものではない、自分が経験してみてそれがわかった、と同胞たちに告げるのである。私は偵察者として送られて危険に直面し、それを乗り越えることができた。自分が乗り越えることができたのだから、他の人もそうはずだというわけです。(p.495, l3-5)

⇒これこそが、哲学者、犬儒派の哲学者の姿。

⇒試練・不幸は、悪ではなく、善。個人を育てるために利用したり有用に活用したりすべき善だと考えざるを得ない。



こうした苦難や困難をすべて活用しなければならない。



すべての困難をですか!? 誰かがあなたを侮辱しても、それは有用で有益なのですか?



そう、すべてだ。格闘家は訓練からどのような利益を引き出していると思うのだね。

大変な利益を引き出しているではないか。

私を侮辱する者も、私を鍛える私の相手となるわけだ。

つまり、私の辛抱と冷静さとやさしさを鍛えるのだ!

## 2. ストア派の伝統的なテーゼ(p496-497)

- ・ 悪として外界の事物から現れてくるものは、実は悪ではない
- ・ 理性的な視点からみること…地震や病気などの偶発的にみえる危機を目の当たりにしたとき、ストア派の考えでは「実は世界とその必然的な連鎖の一部をなしていると自分たちに言い聞かせる必要性」がある  
→理性的な存在としての私たちの視点のみから見ることで、悪だと思えるものが実は悪ではないと考えねばならない！

悪と思わせているもの…私たちの「おもいなし」(=思い込み)が、私たちを合理性・理性的存在から隔ててしまう。

⇒悪は、すくなくとも存在論的には悪ではない、ということになる。

↓エピクテトスにおける「悪」との違いは??

## 3. エピクテトスにおける「悪」(p.497)

- ・ エピクテトスにおける悪…それが私たちにとって有害であるという限りにおいて善へと変容されるような悪
- ・ キケロによる古代ストア派的「悪」への反論…「たとえ私がそれは悪ではないと認め、世界の理性的な秩序の一部をなしていると考えたとしても、それが私たちにとって有害であることはかわりがない」
- ・ 古代ストア派における「苦しみ」…苦しみという個人的な経験を無効にしてくれるのは全体についての思考
- ・ エピクテトスにおける「苦しみ」…苦痛に執着し、それを(自分のために)利用する。悪が悪ではないのは、それが私たちを苦しめるからこそ。試練という態度によって不幸として認められるかぎりにおいて悪は善。

## 4. ギリシア悲劇における試練(p.497-499)

- ・ ①ギリシアの古典悲劇…試練の考えが根底にあるのではないかという指摘  
例)ヘラクレスの試練、オイディプスの試練  
神々の嫉妬と人間の行き過ぎの衝突、競い合い、ゲーム  
もっとも代表的な例…プロメテウスの話  
人間は不幸に襲われながら偉大な者に成長し、不幸から抜け出す。  
偉大さ=神との和解の偉大さ、平和の偉大さ  
⇒ギリシア悲劇では、敗北したとして、人間が力を取り戻し、神と和解し、神々は人間を保護してくれる。
- ・ 古代ストア派や、セネカやエピクテトスにおける試練…苦難という父権的な配慮によって神々が人々に差し向けるもの

## 5. 救済というキリスト教的な教養に、ヘレニズム的な生存の準備が無関心であったことについての指摘(pp.499-501)

- ・ 生全体を育成的で差別的な試練とみなすことが引き起こす理論的困難  
セネカの言葉:神は人間のまわりにさまざまな試練を差し向けることによって人間を神に準備させる  
⇒この準備とはなんなのか?  
セネカは、なんのための準備なのかという問題を重要視していない  
⇒キリスト教:最重要な問題としている  
セネカやエピクテトス:  
「準備としてのこの生は、いったい何に対して準備するのか」  
「試練としての生のひとつの条件でもあり、結果でもあるこの差別は、いったい何なのか」  
⇒こうした問いが理論化されない。

- ・ キリスト教における「試練としての生」…完全に根本的な考え方  
生は試練以上のなにものでもない。  
「生への準備は何に対してするのか」という問題が、反省と思考のもっとも中核的なものの1つになる。  
例：予定とは？人間の自由とは？恩寵とは？神がヤコブを愛しエサウを憎んだのはなぜ？など。  
↓この差をみて、フーコーが今年言いたかったこと

## 6. 生の技法と自己への配慮(p501-504)

- ・ 自己の陶冶の歴史…ヘレニズム・ローマ期にひろく展開した自己の陶冶の歴史における重要な現象を指摘したかった！
- ・ 問題となったこと…正の技法・生存の技法を規定すること
- ・ 自己に専心せよ…ギリシア文化や思考の核  
人間はテクネーという理性的で命令的なある種の文節を参照することなしにはみずからの生を生きること  
はできない＝人間の生や生存はそのようなもの  
⇒どんなに都市が強大でも、宗教が広まっていようと、それが生をどのように扱ったらいいかは教えてくれない。  
⇒人間の自由は、自分自身に実践するテクネー(自分自身の技法)においてこそ、みずからを強制する手段を見出す＝自己への配慮は生存に関わるものの領域の中にある！！
- ・ ヘレニズム時代の正の技法・自己への配慮の関係…逆転やねじれの関係がみられる  
生のよき技法をしかるべきやり方で定義しようと思ったならば、まず自己への配慮から始めなければならないということはない。  
生が試練となること＝自己を育成することを目的とする生(たえず自己を配慮しながらみずからの生を生きなければならない生)の誕生

	古代ギリシア時代	ヘレニズム時代以降
自己に専心する理由	よく生きるため 理性的に生きるため 他者をしかるべきやり方で統治するため	自己に対してできるだけよい関係をもつため 自分に向かって生きるため 自己への関係とともに生きるため
物語における試練	自己を育成するような試練 生はひとつの試練であることを明らかにする不幸が降りかかる どの程度まで登場人物が純潔(個人的な清らかさ)を守ることができるのか 【キリスト教との関係性】 ⇒この純潔の保持という考えが、キリスト教的靈性に再び見いだされる ⇒自分に対して生きることを意味する	神との力比べ試合 戦いと競い合いの世界

- ・ 次回取り扱うこと…思考の訓練について

## 7. H松のコメント&気になったこと

- ・ P495 の偵察者のエピソードを読んで、「危機(Crisis)は教育のための善」とフーコーが語っていることを非常に興味深く思った。2020 年の全国一斉の休校騒ぎのとき、大学生も特別支援学校の子どもたちも

皆同じように強制的に「不登校」状態にされたわけだが、まなキキに所属している学生たちの取り組みは、この状況下でもやり方によっては楽しく学べるぞと偵察して回る哲学者の姿だったと言えるだろうか？

- ・ギリシア時代の正の技法を規定するものは、あくまで自分の生存に関わる実践のなかで見いだされるものであって、宗教や政治、経済などの外からやってくるものに規定されていい技法ではなかったという整理で良いだろうか。